
引きこもりと少女の冒険譚

ひらきなおる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

引きこもりと少女の冒険譚

【Nコード】

N9232S

【作者名】

ひらきなおる

【あらすじ】

引きこもりと少女が異世界で冒険します！以上です！これ以上言うことないです！ばーかばーか！

引きこもりの基準は家から出ないことと引っ越ししててもいい（前書）

別に言うことないよ！

引きこもりの基準は家から出ないことというにといてちょうだいね

世の中には数え切れないほど不思議なことが起きる

これは小生が経験した不思議なことの一端である

話は数十年前に遡る。^{さかのぼ}小生の家はそれなりに大きかった、町で六番目くらいに大きかった。

当然家が大きいということはそれなりの地位が親にあると言う事で比較的恵まれた生まれだった、小生には姉が一人、兄が一人、妹が一人という一般家庭と比べたらやや多めの兄弟がいた。

姉は頭脳明晰、沈着冷静、^た立てば芍薬座^{しゃくやく}れば牡丹^{ぼたん}歩く姿は百合^{ゆり}の花。

兄はと言うと運動神経抜群、顔もそこんじよそこらのモデルよか整った顔をしており、学校にフアンクラブまでいる始末である。

妹もやはり俗に言う美少女で、年にしては非常に聡明である、しかしながら時間があれば小生に嫌がらせするのはやめていたきたい、この前^{はな}鉢^みが前後左右から飛んできたのには肝が冷えた、そういえば
三日前も

閑話休題

では、小生の自己紹介をしておこう、小生は小学校で暑苦しい（し

かしながら頭のほうは寒々しい）校長先生に「もう来ないでくれ」と涙ながらに頼まれ、それ以来この年まで家の図書館で要らぬ知識をつけ続けているどこに出しても恥ずかしい引きこもりの青年である。

とは言え小生は普通の引きこもりになるつもりなど毛頭無く、朝は五時に起床し、起き抜けに息絶える寸前まで走りこみ、昼食を食べた後に今度は俗に言う筋トレを五時間、それが終われば図書館に引きこもりひたすら本を読むと言う充実した生活を送っている。

親はこの様子を見て「いざとなったら自衛隊にぶち込んでやれば良い」などとほざいている様だが、小生は上下関係というものが非常に好むところではないのでいざとなれば成績優秀な姉か兄の脛をかじって生きていくつもりであった。

そんな筋肉モリモリ、マッチョマンの変態の小生（実はそれほどマッチョではない）に転機が訪れたのが妹が小学五年生になり、小生が十八になったところであった。

その日は早めに自己鍛錬を切り上げ図書館で本を見ていたときであった、尿意を催したので厠に行こうと図書館の扉を開くとそこは雪ぐn……ではなく草原が広がっていた。

また妹の仕業かと思い、呼んでみることにした

「おい、妹よこれはどういうことだ」

「私もこれに関しては身に覚えが無いよー」

と言いながら床下から這い出てくる妹、どこから出て来ているんでしょうかこの小娘

「そうは言っても交友関係の少ない僕にはこんなことをする奴はお前以外に思いつかん」

「さすがに私でもこんなことする技術は無いよー」

うーむ、それでは自然現象ということか、うつそでー

少し取り乱したがやはり現実のようである、妹のぷにぷにしたほつぺたを引つ張ると「いふあいふあい」と言っていたしな。

「僕の見た文献だとこの先はファンタジーでマジカルでリリカルな世界に繋がってる可能性が非常に高い」

「じゃあ、さっさと準備して行こうよー」

準備と言ったら何だ、とりあえず金目のものを持って行くことにする、どうせ家のもの一つや二つなんぞ無くなったところで誰も気にかかけまい。そうして必要最低限のものをバックパックに入れ、準備ができたと腰を上げ妹が帰ってこないうちにさっさと行くことにしようとする

「先に行こうとなんかしてないよねー？」

「クソがッッ！」

思わず吐き捨ててしまった

「なんでそういうことするかなー」

「お前には未来がある、お前の将来を僕は壊したくないんだよ」

と白を切って妹思いの兄を演じることにする

「その将来を決めるのは自分なんだから問題ないでしょー」

「ぬかしおる」

これ以上問答をしたところで埒が^{らち}あかないので記念すべき一歩を踏み出すことにする。

「はじめのいーp」そあいー！

妹が小生を突き飛ばし俺は草原に顔からダイブした、記念すべき第一歩は顔面から、ということになったコノウラミハラサデオクベキ
力

引きこもりの基準は家から出ないことというところにしてちょうだいね（後書

兄や姉はどうしようか、そのうち異世界にきてもらおうかどうかどうしようか、もう飽きてきました塩辛いものが食べたい

はじめてのりゃくだつ（前書き）

コイケヤのリッチコンソメうめえ

はじめてのりゃくだつ

はてさて、妹と小生はこのように異世界に降り立つことに相成ったわけだが我々が通り過ぎると扉は見えなくなった、きちんと準備しておいて良かったと言えよう。

それにしてもこの小娘リヤカーまで持ってきて用意周到にも程がある。

「自分で引いていけよ」

「わかってるよー」

意外にも素直に聞き入れた、もう少しゴネると思ったが

「でも戦闘要員はお兄ちゃんだからねー」

「ぬかしおる」

万が一戦闘になったらこいつを囷にして逃げるつもりだ、この顔面の痛みのツケは大きいぞ……

2時間ほど歩いていると村が見えた、見えたのだが……

「ひい……助けて…助けてくれええええ!!」

「嫌だあ!死にたくないっ……」

「畜生ッ!このまま死ぬのか!」

どう見ても修羅場です本当にありがとうございました。

とりあえず目立つリヤカーから離れ、伏せの状態で様子を見ることにする、どうやら化け物に襲われているようだ、それこそファンタジー小説等に登場するゴブリンのような見た目である。

さてこのゴブリンども、見た感じ非常に数が多い、一匹一匹は貧弱そうだが三匹以上に囲まれて棍棒で滅多打ちにされたら歯が立たなさそうだ。

そのゴブリンが約十五匹いて、村人の戦闘要員はおよそ五人、こうして見ると均衡しているようにも見えるが男たちは逃げ腰で、しかもゴブリンは一人に対して五匹が集まっているので、これではあまり持たないだろうと判断した。

「助けに行かないのー?」

「村人を全滅させた後で疲れたゴブリンどもに奇襲を仕掛けるとい
うのが現実的な策だな」

「外道だねー」

「合理的だと言え」

「具体的にどうするのー？」

決まっている

「スニーキングミッションだ」(ドヤ顔)

戦闘に勝利したゴブリンは生き残りを探すために戦力を分散する、そこを狙い一匹ずつ確実に暗殺していく。

「勇者とは程遠いねー」

元より勇者になるつもりなど無い、そういうのは姉や兄のような人材に任せておけばいい、卑怯？これは戦略と言うものだ。

そうして数を減らしていくこと数十分、ようやくゴブリンも異常に気づいたようだ、このときゴブリン残り三匹、あまりにもお粗末な頭脳である。

「十二匹も仲間が減って今気づくとか残念すぎるだろ」

「こちらとしてはありがたいけどねー」

しかし残り三匹とは言え油断は禁物、何が起るかわからないのが実戦である。生き残りを全員殺してもらわないと略だ………もとい戦利品調達の際の目撃者がいなくて済む。

「悪だねー」

「何を諦める必要がある、奪い取れえ！今は悪魔が微笑む時代なんだ」

「すごい似合ってるよねー」

お前はさしずめアミバといったところか、と言うと間違いなく刃物が飛んでくるのでやめておく
さて、村人が全滅したようなので心置きなくゴブリンどもをSAT
SUGAIできる。

「罪無き村人さんたちの敵だー」

「黙ってみてた僕らが言えたことじゃあないと思うが」

そう言いながら家の屋根から植木鉢や壺をゴブリンの頭をめがけて投げ落とす、ゴブリンどもが小生たちの姿に気づくが時既に時間切

れ、脳漿を撒き散らしながら奴らは死んだ、ゴブーリ（魔物）きつたね

それからの泥棒タイムだったが、どうやらこの村かなり農業で儲けてたようでかなりの額が手に入った、ついでにいくつか簡単そうな絵本や歴史書、数学の教科書のようなものを頂いてきた。

こっついうものは勉強しておかないと厄介なことになるからな。

はじめてのりゃくだつ（後書き）

設定考えるの面倒くさいです、魔法とかいつ出てくるか自分でもわかんないです、行き当たりばったり過ぎて嫌になっちゃうね

ふぁーすところなと（前書き）

GW中なので時間がありませんで困る

ふぁーすとかんたくと

この世界の硬貨は、銅貨百万枚〃銀貨一万枚〃金貨百枚〃白金貨一枚と百枚ごとにグレードアップするらしい、わかりやすくて安心した。

さてこの村から略奪した硬貨はおおよそ金貨五十枚分、殆どが銅貨と銀貨だった、わかりやすくりんご換算にするとりんご一個〃銅貨一枚なので実に約りんご五十万個分ということになる。

こうして無一文から一転、大富豪になった小生達ではあったが、町が見つからないことには使い道が無い。

というわけで村から出ることにした。

しーあわっせはーあーるいつてこーないーだーかーら奪い取りに行くんですよー

歩きながらこの世界について本から（字は読めなかったので絵本等から分析しつつ）読み取ったことを説明しようと思う。

まずこの周辺は仮にA地域だとしておこう、A地域には魔物はさほどおらず、比較的安全な地域である。A地域の特徴としてはただ広い草原、安定した気候、農作業や酪農に適した土等人が住むのに非常に適しているということだろう。当分はこの周辺で人を探そうにしようと思っている。

次にB地域、ここでは森があり多くの魔物や化け物がいるらしい、しかしこういう森には大抵エルフがいるものである、十分装備を固めたらこちらの方にも足を向けようと思う。

最後にC地域、とはいったもののC地域はB地域の深い森を抜け、さらにその先の砂漠を越えなければいけないため未開の地とされている。説明したからにはいつかは行くことになるのだろうが、はてさて何時のことになるやらわかったもんじゃない

と、まあこのような感じになっている。小生説明お疲れ様です！かっこいいぜ小生！

「ねーねー」

「あぁん？何だ小娘」

「あそこ馬車があるよー」

そちらを見るとなるほど、馬車が止まっている。

「不用意に近づくのは危険だろう、少し様子を見るぞ」

「りょーかーい」

身を低くして様子を伺う、見たところ女が一人男が三人程度、装備

品もちゃんとしているし、おそらく賊の類ではなく旅人のようなものだろう。

手を大きく上げながら声をかけることにする、村では悲鳴も認識できたしこちらの言語も理解できるだろう。

「すいませえーん！」

「ッ誰だ！？」

「おっと、驚かせてすみません。道に迷ってしまったので……」

「……ここから南に村があったろう、そこで聞けば良かったのではないか？」

「それがですねえ、僕らが着いたときには化け物どもが村を襲ってしまって、気づかれてしまったので必死で逃げてきたんですよ。」

「そうか……大変だったようだな、良ければ我々と同行させることも出来るが」

「この馬車はどちらに向かわれているんですか？」

「ここから馬車で二日ほど行った所に町がある、そのギルドで我々は生計を立ててるんだ」

ほう、ギルドか、詳しく聞かねばなるまい。

「詳しく教えてもらっても構わないでしょうか？」

「それは別に構わないがギルドのことも知らないで町に行ってしまうと思うてたんだ？」

「いえ、実は僕たちはあの村からかなり離れた小さな集落の出身でして、この辺の常識についてはかなり疎いんです」

「そうか、では続きは馬車の中で話そう、私の仲間の紹介もしとかならないかな」

なんかこのオッサン嬉しそうだな、世話焼きなのか？まあこちらとしてはありがたいが。

「そんなことより私今回空気だよー」

知るか

ふぁーすところなくと（後書き）

あんまり量が多いとモチベーションが持たないでござる

チートなんて幻想（前書き）

主人公は体を鍛えまくっているので常人としてはそこそこのですが、チートということはありません。

むしろ実戦経験が非常に少ないので立ち回りが非常に雑です、素人です、力とスタミナが常人の中では優れてるだけです、ただのゴリラです。略してただゴリ

チートなんて幻想

揺れる揺れる揺られて揺れる、馬車の中からこんにちは、小生はギルドの説明をうけています。

この世話好きのオッサンのおかげでかなりこの世界に詳しくなった。

曰くギルドには入ると様々な物が割引される

曰くギルドに入らないと仕事は出来ません

曰くギルドに入ってやせました

曰くギルドに入って彼女が出来ました

まあ最後の二つは置いといて割引は正直有難いし、先の見えない旅をするよりかはこの周辺で安全第一に働く方が建設的だろう。

世話焼きのオッサンに礼を言い、早速ギルドの受付に向かって登録をする、受付はかわいい女性……ではなくガチムチのお兄さんだ。

「いらっしやいませ」

「ギルド登録をしたいんですが」

「あなたはよろしいのですが……その子はどうされますか？」

「……」

そついや小娘もいたんだっけな、影が薄いから忘れていた。

「おい、どうするんだ？」

「んー私はさっきの冒険者の人に魔法教えてもらうように頼んでたから別にいーよー」

こいつちゃっかり弟子入りしてやがる、ということはこれから先は真正正銘一人つてことか……フン！小娘一人いなくなったただけだ、
どうと言つことは無い。

「じゃーまた会うことになったらよろしくねー」

「飽きたらギルドに帰って来いよ」

「それ無理かもー」

……つまり……どういふことなんだってばよ

「あの人たち森の方に行ってエルフの村探すって言うロマンチストらしいからー」

「ああ、そう」

最早突っ込む気力すら起こらん、さっさとギルド登録してしまおう。

「じゃーねー」

「精々死ぬなよ」

こんなあっさりしたお別れが実の兄弟のものとは誰も思っまい。

ギルド登録も済んだので、ひとまず装備を整えることにした。
まず向かったのは防具屋、スタンダードに皮の鎧を買おうとして財布を見ると

「
やられた」

妹の手紙と五分の一に減った所持金があった

曰くこの手紙を読むころもう私は（この町から）いないでしょう

曰く女の子はお金がかかる

曰くかわいい妹のための出費だと思って我慢してね

とのこと、ハハハこやつめ絶対に許さん地獄の果てまで追い詰めてやる。

店主が小生の顔に怯えていたが気にすることなく鎧を購入。

続いて武器屋で棍棒を購入、こういふときは普通剣だろうと思うだろうがろくに訓練していない小生が持つなら棍棒が適してるだろうと言う判断である。

決して刃物が怖いわけではない、決して、だ。

さて、こういう話での定番は武器を持ったら動きが早くなった、魔法が普通に使える、力が常人の数倍といったようなチートだが小生には一切適用されてないようである。

ガックシだな。

チートなんて幻想（後書き）

妹は番外編で出るかもしれませんが、しばらく話が進んだら再開フラグが立つかも知れませんがあくまで予定は未定です。
お兄さんお姉さんはそのうち出したいと思っています

昇段試験（前書き）

主人公の名前を言っ
て無いんですが深い意味はありません、ただ単
に考えるのが面倒くさいだけです。

昇段試験

ギルドの説明をしよう、ギルドの仕事をこなしていくとランクが上がる昇段試験のようなものが受けられる。

ちなみに小生は最低ランクのFランク、小生がEランクに上がるために必要な仕事はFランク相当のお使いミッションを五つ、それをこなした後にゴブリン討伐のミッションを受ける必要がある。

とはいえ、ゴブリンは集団行動を基本で動いているのでEランクの人のお供について狩るということになる。

ちなみにこれはEランクの人がしんが殿をして、小生達FランクがEランクが始末し損ねたゴブリンに止めを刺す、と言う形になる。

これはEランクのDランクへの昇段でもあるのでEランクの人も一生懸命にやらざるを得ないのだ。

よく出来たシステムである。

さて、ここで新たに判明した小生の特技を教えよう。

こちらの世界に来て普通に異世界人と会話ができることから、ひよっとしたら動物とか魔物や化け物と会話できるんじゃないかね？と考えたところ普通に出来たのである！

これはこの世界で生きていく上で大きいアドバンテージになるだろう。

というわけで小生は今、ゴブリン討伐に向かうための馬車に乗っている。同乗しているのはEランクの人が三人、小生を入れてFランクが二人だ。

ちなみにもう一人のFランクの人は魔術師だそうだ、ついなので魔術を教えてくれないか頼んでみたところ。

「え？嫌だね、どうしても言うなら金よこせよ、銀貨十枚な（笑）」

と、わけのわからないことを供述していたためとりあえず間接を捻っておいた。涙目で謝罪していたが知ったことではない、初対面の人にナメた口を利いた勉強代だと思っていただこう。

そうこうしている間にゴブリンの住処に着いた。今回の住処は比較的小さいほうでゴブリンが十五匹程度だそうだ、早速馬車から降り、物陰に隠れる。

後ろの魔術師が恨みがましそうな目でこちらを見ているが知ったことではない、覚えてろよ… 後で痛い目にあわせてやる… 等と物騒な言葉が聞こえたので、やめてくださいよお、ゴブリンに気づかれちゃいますよお？と言いなながら頸動脈を絞めながら囁いたら顔を真っ赤にして暴れていた。発情してんなよ、邪魔なのでさっさと気絶させる。

Eランクの人達がこちらに近づいてきた

「まず私達が突入するから逃げ出した奴の始末を頼む…ところでそいつはどうしたんだ？」

さっきの行動は見られてなかったようだ、良かった良かった。

「ちょっとゴ布林アレルギー持ちだったみたいですね、こいつは馬車に戻しますよ」

「君一人で大丈夫なのか？」

「ええ、こう見えても腕っ節と体力には自信がありますんで！」

「ああ、じゃあ我々は先に行って来る、声をかけた時に手伝ってくれれば良い」

「死なない程度に頑張りますよ」

そう言うとEランクの二人は苦笑しつつ巢に向かった。

さて、こいつはここに置いて小生も向かうとしますか。

ちなみにゴ布林との会話は成立しない、前試してみたところ

『ヒヤッハー新鮮な肉だあ！』

『ヒヤッハーぶち殺し確定だぜえ！』

と返事が返ってきたので知的な会話は出来ないだろうという結果だった、頭が痛くなる。

と、回想に耽^{ふけ}っていた所、早速出番が来たようだ。

『ヒヤッハー襲撃だあ！』

『ヒヤッハーこいつは分が悪いぜえ！』

『ヒヤッハーこんな洞窟にいられるか！俺は逃げるぜえ！』

最後の奴が逃げてきたようなので物陰から足を出して転ばせる

『ヒ……ヒヤッハー助けてくれえ！』

「悪いが仕事なんだな」

『うわらば』

棍棒で殴って殺す、同じように逃げてきた奴らを足を引っ掛けて転ばす 棍棒でトドメのコンボで二、三体始末する。

「おーい終わったぞー、そっちは大丈夫かー？」

「何とか無事です、そちらも無事で良かった」

「この程度で苦戦してちゃDランクに上がったところですぐ死んじまうさ」

やはりDランクに上がるとモンスター討伐が中心になるようだ、そうなるとやはり小隊でも組んだ方が良さそうだろうか。

「まあ何にせよこれで昇段試験も終了だ、Eランク昇格おめでとう」

「そちらもDランク昇格おめでとうございます、また機会があればよろしく願いします」

「おう、俺はキース、んでその無口な奴がギルだ」

「……」

何か言えよ

「…良い立ち回りだった」

「見てたんですか」

「…少しだけ…な」

「えーっと…ありがとうございます」

「……うむ」

なんとも絡みづらい人だ、しかしこういったコネは後々便利になってくるので変な顔をしないようにしておこう。

目上の人に敬意を払って損は無いからな。

「それで、アイツはどうするんだ？」

「やっべ忘れてた」

キースさんが指差した先には未だにのびている魔術師（笑）がいた、どうしようコレ

昇段試験（後書き）

相変わらず先が見えない状況です、どうしよう

こんにちわすらいむさん(前書き)

いつか魔術師ルートとか作りたいです、飽きなければだけど。

正規ルートは魔獣・魔物使いということにします、会話できる能力付けちゃったしね。

いにちわすらいむさん

どうも、めでたくEランクになりました。

Eランクになったこともあり、モンスター退治のミッションを受注できるようになりました。これはもう小生の能力を使うしか無いでしょう、ビバ魔物使い、オレサマオマエマルカジリ

さっそくミッションを探すとスライム退治のミッションがあった、これは珍しい

というのもこの世界のスライムは水の精霊のような立ち位置で、わざわざスライム等と魔物のような言い方をするのは割と珍しい。というわけで依頼主の居る村に向かった。

「それでえゝマジスライムがあアレなんっすよおゝ」

「……アレと言いますと？」

「あつれえゝ聞いてませんでしたあゝ？ いけませんよう 人の話はちゃんと聞かないとおゝぶんぶくりゝん（怒）」

「（聞いてねーよ）……アハハ、ソウデスネ」

第一声がコレである、殴りたい。なんなのこいつ
こんな生物と会話しているとこっちまで馬鹿になっなまものてしまいそうだ。

話を聞いたところわかったこと

・スライムにご飯をあげたんですよ

・そしたらあゝスラちゃんマジパネエ悪臭放つてて

・マジでえゝさげばよおお　　みたいなあゝ？

・これはもうスラちゃんこらしめちゃってえゝ悪臭やめさせるしかないかなゝって思ったんですよ（爆）

「……そのエサというのは何ですか？」

常識的に考えたらエサが原因だろう、それ以外に考えられない

「これですゝ（照）」

「……（生ゴミかよ…）」

そりゃ臭くなるわ

とりあえず現場に向かうことにする、同行を頼んでみたら

「臭いからゝ正直お断りしたいゝみたいになゝ臭いしゝ」

殺したい、地図渡された、何か変な染みが付いてる、死ね

現場に到着、かなり綺麗な湖なのだが周辺には何とも言えない吐き気を催す臭いが立ち込めている。

しばらく進むと泥水の塊…いや、スライム（泥）が姿を現した。

『どちらさまですか……』

声に元気が無い、顔色も悪そうだ、茶色だし。

「失礼、僕は旅人でああなたの退治を頼まれたのですが……」

『えっ人間なのに私の言葉がわかるんですか！？』

「ええ、まあ」

嬉しいのはわかるがあまり身を乗り出して来ないでほしい、臭いし。小生が露骨に嫌な顔をするのがわかったようで残念そうな顔で引っこんだ、罪悪感がマッハですよ奥さん。

「その…体の中にある不純物って排出できますか？」

『できないことは無いんですが…どこに出せばいいんでしょうか、ここを汚すのは気が引けますし』

「ああ、それなら」

依頼主の家を指差した

「あの家にぶちまけてきたらどうでしょうか」

『それは……あの人間が困るのでは…?』

「いえ、一度ゴミの海に溺れてみたいとおしゃっておられたので」

『そうなんですか…やっぱり人間はよくわかりません…』

「まあ、彼がちょっと変なだけですから……」

こうすることで仕事も解決できてイライラも解消できるってもんよ

『では行つてきますね!』

「僕は様子を見ることにしましょう」

しばらくすると依頼主の家からナニコレパネエーとかチヨオーモー

レツウーとか声が聞こえてきた。

「さて、僕は報酬を頂きに行きましょうか」

『あの…私を退治してないんですけどいいんですか？』

と、おずおず言うスライム（真）さっきは臭いで直視できなかったが、綺麗な女性の姿をしている。
言うておくがいくら綺麗だからといって、向こう側が透けて見えるようなゼリー状の物体に欲情はしない。

「いえ、今回はこの悪臭の原因を取り除くという仕事だったのでわざわざあなたを退治する必要は無いんです。」

ぶつちやけ面倒くさいというのもある、そう言つとスライム（美）はひどく感激したようで

『あなたのような心優しい人間がいるとは！感激しました！是非連れて行ってください！役に立ちますから！』

等とつとつしいくらい絡んできた、うんと頷くまでこの勢いで話しかけてきそうだったので仕方なしに頷くと

『それでは今後ともよろしく願いします!』

と、頭を下げた。しかしこいつどうしようか、このまま町に行ったら悪目立ちしそうだ

『それなら問題ありませんよ』

どういうことだ、と尋ねる前に鼻や口から入ってくるスライム（無味無臭）な、なにをするきさまー!!!

『こいつのことです』

と自慢げに頭の中から声が聞こえた、こいつ小生の体に寄生しやがった。

『こつすることであなは目立たないし私は栄養も取れてまさに”ぎぶあんどぎぶ”です!』

「ああそうかい」

小生はげんなりしたまま依頼主の家に向かい、ゴミにおぼれて気絶している依頼主を引きずり上げて懷から報酬を頂いた。
またのご利用をお待ちしておりますってな

こんにちわすらいむさん（後書き）

スライムが仲間になりました、次回はDランク昇段試験でも受けさせようかと

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9232s/>

引きこもりと少女の冒険譚

2011年10月9日01時28分発行